



一代で世界のスポーツブランド築く 未来を担う青少年に靴を

私心を持たなかった鬼塚喜八郎

戦後の混乱期から一代で世界的なスポーツブランドを築き上げた人物がいた。神戸を拠点とする総合スポーツメーカー「アシックス」の創業者鬼塚喜八郎だ。その歩みはバスケットシューズから始まったが、鬼塚はスポーツ用品については全くの素人。きっかけは闇市がびこる社会で荒廃していく青年たちを憂い、スポーツを通じて健全な道へ導こうという思いからだった。道のりは決して平坦ではなかった。2度も死線をさまよい、倒産の危機にも立ちながら成長を遂げた裏には、自ら全国行脚をして商品を広めていった並外れたバイタリティーと、一切の私欲を捨て、従業員や提携工場と心をつなげて社会に役立ちたいとの信念があった。

(神戸新聞東京支社編集部長 東方利之)

鳥取で「坂口喜八郎」として生まれる

鬼塚喜八郎は1918（大正7）年5月29日、鳥取県気高郡明治村大字松上（現・鳥取市松上）で坂口家の三男二女の末っ子として生まれた。農家だったが、祖父が和紙の仲買人で稼ぎ、村では有数の素封家だった。「喜八郎」の名は、祖父が大倉財閥の創始者大倉喜八郎にちなんで付けた。生まれたときは「坂口喜八郎」だった。

明治尋常高等小学校（現・鳥取市立明治小学校）を卒業後、1931（昭和6）年、県下随一の鳥取第一中学校（現・鳥取県立鳥取西高校）に合格した。次第に戦時色を濃くしていた時代。素封家といえども経済的な余裕はなく、陸軍士官学校を目指した。だが、4年生の時に肋膜炎を患い、士官学校受験は叶わなかった。

療養生活を経て1939（昭和14）年、20歳の喜八郎は徴兵検査に合格し、姫路の陸軍第十師団輜重兵第十連隊に配属された。そして幹部候補生の試験に合格し、見習士官から将校となった。この連隊で運命的な出会いが待っていた。上田皓俊中尉だった。

上田中尉は陸軍士官学校出身で上

官に当たるが、2人は同い年で仲が良かった。姫路師団はミャンマーでの作戦に派遣されたが、喜八郎は留守部隊の指導を言い渡された。出兵前日、上田中尉は「神戸の鬼塚夫婦（清市、福弥）と養子縁組の約束をしている。俺が戻るまで面倒を見てやってくれ」と言い残していった。

戦友の遺志を継ぎ 鬼塚家と養子縁組

喜八郎は長野で終戦を迎え、郷里の鳥取へと戻った。8年ぶりに生家で正月を過ごしていたところへ手紙が届いた。鬼塚夫婦からだった。上田中尉の消息が分からず、生活に困っているとあった。上田中尉が復員するまでのつもりで三宮へ。一面が焼け野原だった。28歳、鬼塚家の



養子縁組をした養母福弥と記念撮影

2階に下宿しながらサラリーマン生活が始まった。しばらくして「上田師団参謀、ビルマで戦死」の公報が届く。鬼塚夫婦の落胆ぶりは大きく、戦友の遺志を継いで鬼塚家と養子縁組をした。「鬼塚喜八郎」としての人生が幕を開けた。

サラリーマン生活は葛藤の連続だった。闇市で富を得る経営者に我慢がならず、3年半で辞めた。その頃、若者や子どもたちを次代を担う大人へと導きたい、との思いが膨らんでいった。姫路師団の戦友で兵庫県教育委員会の課長に会った際、「靴屋になって青少年がスポーツに打ち込めるようないい靴を作れ」との助言をもらった。神戸は履物の街、ゴム靴の街。これだと直感した。1949（昭和24）年3月、自宅に「鬼塚商会」を創業し、半年



昭和24年に開業した「鬼塚株式会社」

後には借金をかき集めて「鬼塚株式会社」を設立した。

バスケットシューズで 全国行脚

当時の県立神戸高校バスケットボール部の監督の勧めもあり、バスケットボールシューズ作りから始めた。胸躍る思いで委託工場に頼んでどうにか作ってみたが、監督に見向きもされなかった。選手の意見を聞き、改良を重ねたが、靴底が滑りすぎる。ある日、夕食に出された酢の物のタコを見てひらめき、吸着盤のような凹型の靴底を考案した。鬼塚式バスケットシューズの誕生だった。だが、商品価値があっても販路が



タコの吸盤をヒントにしたバスケットシューズ

なかった。問屋に門前払いされた喜八郎は全国行脚に出る。木賃宿や駅で野宿しながら、小売店に直接売り込む「裾野作戦」と学校の監督やコーチに掛け合う「頂上作戦」を繰り返した。徐々に口コミで評判が広がり、虎印のブランド「オニツカタイガー」が世に認められていった。

1952（昭和27）年春、喜八郎は働き詰めがたたつて肺結核を患う。新薬が効いて約1年で治癒するが、1年後に再発。またもや次の新薬に助けられた。2度も生死をさまよった約4年間の闘病生活。この間も社員に指示を出し続け、神戸・長田に自社工場を作り、三宮に新本社を構えた。社員の結束は固く、一人一人が手足となった。闘病中も注文は増え、従業員は80人余りまで増えた。



マラソンシューズ「マジックランナー」



ローマ五輪を視察する塚喜八郎

次に力を入れたのはマラソンシューズだった。選手の悩みは足のマメ。喜八郎は医師を訪ね、マメのできるやけどの原理を教わった。上部に目の粗い布を用い、前と横の部分に穴をいっぱい開けた空冷式の「マジックランナー」を開発した。

「頂上作戦」で世界へ進出

1960（昭和35）年、ローマ五輪に出向いた喜八郎は、自社製品で活躍する日本勢に目を細めながらも、海外メーカーに比べて品質やデザインが遅れていることを思い知らされた。初の海外出張で世界を視野に入れた商品開発を決意した。

喜八郎が商品開発とともに押し進めたのが同族経営からの脱皮と取引

先への情報公開だった。会社は社員や取引先みんなのもので、運命共同体であるとの信念から持ち株の7割を社員に分け、協力企業には経営状況を積極的に開示した。株式上場も果たした。喜八郎の口癖は「企業は公器なり」だった。

だが、1964（昭和39）年の東京五輪が迫る頃、経営多角化の失敗で窮地に立たされた。上場1年目から赤字を出し、市場からたたかれたが、五輪予算3000万円を削ることはしなかった。迎えた地元での五輪。活躍したレスリングや体操、マラソンの日本選手の足でオニツカタイガーが輝いていた。広く海外の目



マラソンの寺沢徹選手とシューズの打ち合わせ

に止まり、世界的なブランドの仲間入りを果たした。同時に多角化経営から脱却してシューズ事業として再スタートを切った瞬間でもあった。

世界戦略の強化へ向け、喜八郎は世界の有力選手をターゲットに得意の頂上作戦を展開した。選手から直接要望を聞いて改良につなげた結果、愛用者が徐々に増えていった。

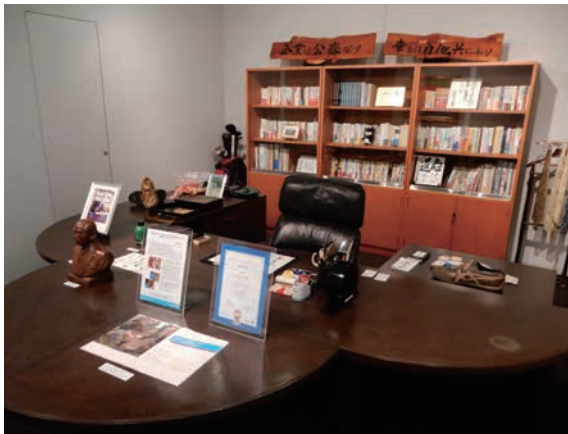
欧米のメーカーとの激しい競争を繰り広げながら、1968（昭和43）年のメキシコ五輪では20数カ国の選手がオニツカのシューズを使うまでになった。続くミュンヘン五輪、モントリオール五輪でオニツカの地位は不動のものとなったが、海外メーカーはウエアなどを含めたスポーツ用品をトータルで提供し、契約を広げていた。

3社合併で 総合スポーツメーカー誕生

多角化経営では痛い目に遭ったことのある喜八郎だが、シューズ一本では世界の波に乗り遅れるとして、スポーツウエアメーカーのジイティオとジュレックとの合併を決意する。1977（昭和52）年7月、喜八郎が社長に付き、総合スポーツメーカー「ASICS（アシックス）」が誕生した。社名はラテン語で「も



3社合併でアシックス誕生



本社に保存されている執務室（非公開）

し神に祈るならば、健全な身体に健全な精神があれかしと祈るべきだ」を意味する（Anima Sana In Corpore Sano）」の頭文字からとった。喜八郎が神戸の焼け跡でスポーツシューズを手がけたときの理念そのものだった。

産みの苦しみも味わった。旧3社の商品の中で売れるものと売れないものができ、重なっている商品群の整理に迫られた。勝負をかけたスキーウェアも在庫の山。喜八郎は合併1年後に非常事態宣言を出し、消費者ニーズをくみ取った新しいア

創業の神戸に新本社 80歳から絵画創作

1985（昭和60）年、一時、大阪に移していた本社を神戸に戻し、ポートアイランドに新社屋を建てた。喜八郎は神戸について次のように記している。「神戸は開放的な土地柄だ。よそ者だからと門を閉ざさず、必要以上に相手の領域に入り込むこともない」。自由な風土が喜八

シックスとしてのブランド確立や量から質への転換、人心の統一を進めていった。こうしてアシックスは喜八郎の陣頭指揮の下、名実ともに世界を股に掛ける総合スポーツ用品メーカーの地位を不動のものとした。

郎の真つすぐさと調和し、神戸市が宣言したファッション都市を体現していく存在となった。

喜八郎は2007（平成19）年、89歳で亡くなった。2度も生死の境をさまよい、事業では何度も危機があった。まさに七転び八起きの人だった。創業者の死から3年目、本社ビルの横に立てられたアシックススポーツミュージアムには、イチローさんや高橋尚子さんから、名だたるトップアスリートと写った写真が飾られている。いかに選手と近い存在であったかが分かる。社長である前に生涯開発者であり販売員であった。

本社内には80歳から創作を始めたという喜八郎の油絵「ひまわり」が飾られている。太陽を浴びて輝く満開のひまわりは、大きく育てとの思いで子どもたち笑顔に向けている「靴屋のおじさん」そのもののように見えた。

1918(大正7)年	鳥取県気高郡明治村（現・鳥取市松上）で生誕
1936(昭和11)年	鳥取第一中学校卒業（現・鳥取西高校）
1939(昭和14)年	徴兵検査を受け、陸軍の姫路駐屯に配属
1946(昭和21)年	三宮でサラリーマンに 鬼塚家と養子縁組
1949(昭和24)年	シューズを扱う「鬼塚株式会社」設立
1953(昭和28)年	神戸・長田に直営工場建設
1959(昭和34)年	株式の7割を社員に 同族会社から脱皮
1960(昭和35)年	ローマ五輪視察 本社を須磨に移転
1964(昭和39)年	株式を神戸市場と大阪市場第二部に上場
1968(昭和43)年	メキシコ五輪選手村で商品展示販売
1972(昭和47)年	ミュンヘン五輪でシューズの評価不動に
1977(昭和52)年	3社合併でアシックス設立 社長就任
1983(昭和58)年	世界スポーツ用品工業連盟会長に就任
1985(昭和60)年	神戸・ポートアイランドに本社ビル竣工
//	神戸商工会議所の副会頭に就任
2001(平成13)年	オリンピック・オーダー（銀章）受章
2007(平成19)年	89歳で逝去



直筆の油絵「ひまわり」

【参考文献】

- 「私心がないから皆が活きる」
（鬼塚喜八郎 日本実業出版社）
- 「私の履歴書（鬼塚喜八郎 日本経済新聞）」
- 「世界のオニツカ アシックス創業者 鬼塚喜八郎と故郷・鳥取」（鳥取市歴史博物館）
- 「世界市場へ挑戦するオニツカ」
（ダイヤモンド社）
- 【写真】アシックス所蔵資料